

姉と弟の恋

—— 柏木の物語の基底として ——

藤河家 利 昭

はじめに

柏木は女三の宮との密通の結果として病を得、死に至る。柏木は女三の宮との事件における悲劇的人物としての印象が強い。その一方で、柏木は当初玉鬘に対する求婚者の一人として物語に登場する。これは結局玉鬘が姉ということに分かつて沙汰止みになる。この恋は物語としてそれ以上展開することはない。⁽¹⁾

しかし、知らなかったとは言え、父を同じくする姉と弟の間柄であるにも拘わらず求婚するという点では、他の求婚者の場合と比べて異質である。この恋は柏木という人物を見る上でどのような意味を持つと考えればよいのか、また既に性格面での繋がりが考察されているが、後の女三の

宮事件を引き起こす柏木との間にどのような関わりがあるのかを検討してみたい。

一、玉鬘への求婚

柏木の玉鬘への求婚はどのような意味を持つものかを考えることにする。

柏木にとつて玉鬘は同じ内大臣の子として、姉弟の間柄になる。年齢的には玉鬘の方が一歳位上か、同年になるようである。これは柏木が玉鬘に求婚した胡蝶の巻で、玉鬘が二十一歳、柏木が二十〜二十一歳と考えられるからである。ここでは姉と弟ということにしておくが、ほぼ同年齢と見てよい。

にも拘わらず、柏木は玉鬘を源氏の姫君と思つて求婚す

ることになる。胡蝶の巻で、玉鬘に思いを寄せる柏木の姿が次のように語られる。

わが身さばかりと思ひあがりたまふ際の人こそ、たよりにつけつつけしきばみ、言出で聞こえたまふもありけれ、えしもうち出でぬ中の思ひに燃えぬべき若君達などもあるべし。そのうちに、ことの心知らで、内(2)の大殿の中将などは好きぬべかめり。 (四・三五)

ここで柏木はまだ身分が高くないために思いを表わすことの出来ない若君達の一人として登場している。その中で、姉弟ということを知らないで思いを寄せる柏木に特に触れられている。また同じ胡蝶巻末では、源氏から恋文を贈ることを認められた柏木の姿が同様に語られる。

宮、大将などは、殿の御けしき、もて離れぬさまに伝へ聞きたまうて、いとねむごろに聞こえたまふ。この岩漏る中將も、大臣の御ゆるしをみてこそかたよりにほの聞きて、まことの筋をば知らず、ただひとへにうれしくて、おりたち怨みきこえまどひありくめり。

(四・五六)

ここでは源氏の対応の仕方に差があるのであるが、やはり蜚兵部卿の宮、鬚黒大将とは同列に扱われていない。そして、二人に並んで、本当の事情を知らないで恋に執心して

いる柏木が注目されている。

このように柏木は姉弟の間柄にあることを知らないで玉鬘に熱心に求婚する。従ってこれは形としては姉と弟の恋ということになつても、柏木にとってはそうとは言えない。事実、柏木は玉鬘と自分とが姉弟と分かつた時に恋文を贈ることを止めている。そして、藤袴の巻で、後に玉鬘を訪問した時に次のような歌の贈答をしている。

「妹背山ふかき道をば尋ねずて緒絶の橋にふみまどひける

よ」と恨むるも、人やりならず。

まどひける道をば知らで妹背山たどどしくぞ誰もふみ見し

「いづかたのゆゑとなむ、えおほし分かざめりし。何ごとも、わりなきまで、おほかたの世を憚らせたまふめれば、え聞こえさせたまはぬになむ。おのづからかくのみもはべらじ」と聞こゆるも、さることなれば、

(四・一九六―七)

柏木にとつても、姉弟の間柄であれば、恋文を贈つたりしても何の爽りももたらさないものであることはよく分かっている。歌の前でも柏木は恋文を贈つたことについて、「いでや、をこがましきことも、えぞ聞こえさせぬや」(一

九五」と言っている。玉鬘の側も柏木の真意を測りかねるという言い方で、そのことに立ち入ろうともしていない。この贈答歌はこれまでの二人の關係に終止符を打つ意味もある。

柏木の玉鬘への恋、即ち姉弟の間の恋をどのように考えればよいであろうか。もともとこのようなことになつたのは、柏木が事情をよく調べなかつたからだと言えるかも知れない。これは柏木自身が歌で言っていることである。しかし、胡蝶の巻で、源氏は柏木の手紙を見ながら玉鬘の女房に「おのづから思ひあはする世もこそあれ。掲焉にはあらでこそ言ひまぎらはさめ」(四・四五)と言っているように、根本的には源氏が事情を知らさなかつたからである。行幸の巻で、源氏の長男である夕霧でさえ玉鬘との間柄を知つて、「思ひ寄りざりけることよ、としれじれしきこちす」(四・一六八)という有様である。これは玉鬘の巻で源氏が紫の上に言つた言葉にその意図が示されている。

「さる山がつのなかに年経たれば、いかにいとほしげならむとあなづりしを、かへりて心はづかしきまでなむ見ゆる。かかるものありと、いかで人に知らせて、兵部卿の宮などの、この籬のうちこのましようしたまふ心乱りにしがな。好きものどもの、いとうるはしだち

てのみこのわたりに見ゆるも、かかるもののくさはひのなきほどなり。いたうもてなしてしがな。なほうちあらぬ人のけしき見集めむ」とのたまへば、「あやしみの人の親や。まづ人の心はげまさむことを先におぼすよ。けしからず」とのたまふ。(三・三三二—三三三)

柏木は内大臣の長男として源氏にその声望が評価されているのである。求婚者としての資格はひとまず備えている。特に「なほうちあらぬ人のけしき見集めむ」(「うちあらぬ」は「うちあはぬ」とする本もある)について実際にどうなつたかを見る。兵部卿の宮については、胡蝶の巻で源氏が玉鬘に言つた言葉の中に、「ただかやうの筋のことなむ、いみじう隔て思つたまひてやみにしを、世の末に、かく好きたまへる心はへを見るが、をかしうもあはれにもおぼゆるかな」(四・四二)とあり、髭黒の大将については「右大将の、いとまめやかに、ことごとしきさましたる人の、恋の山には孔子のたふれまねびつべきけしきに愁へたるも、さるかたにをかし」(四二二)とある。源氏は彼らの今まで表に出なかつた面や思いがけない面を発見しておもしろがっている。柏木の場合には本来資格がないのに、姉弟の間柄にあることを知らされなかったために無理に求婚者に仕立てられている。柏木について源氏は「いとしづまりた

る人」と見ているが、この玉鬘への恋を通して、その見方に反する面を讀者に提示することになったのではないかと考えられる。これは作者の側からすれば、柏木の玉鬘への恋を突らぬものとするので、彼の恋のあり方を後の女三の宮事件のために用意しておく必要があったからであろう。

以上のように柏木は姉弟ということを知らないで玉鬘に恋をした。語り手も柏木が玉鬘に恋するのは、姉弟という間柄であることを知らないからであるということに暗に言っているようである。また柏木も姉弟ということが分かっていれば、玉鬘に惑うことはなかったであろう。とすれば、これは文字通りの意味で姉弟の恋とは言えないかも知れない。しかし、その一方で姉弟ということを知らないで恋をするということに柏木の物語の特色があるとも考えられる。この点について考えるために、兄弟姉妹の間の恋を扱った物語等を参考にしてみたい。

『源氏物語』の中には総角の巻に、匂宮が姉の今上の女の宮を慕う場面がある。二人は同じ明石の中宮腹である。

在五が物語を描きて、妹に琴教へたる所の、「人の結ばむ」と言ひたるを見て、いかがおぼすらむ、すこし近く参り寄りたまひて、「いにしへの人も、さるべきほどは、隔てなくこそならはしてはべりけれ。いとう

とうとしくのみもてなさせたまふこそ」と、忍びて聞こえたまへば、いかなる絵にかとおぼすに、おし巻き寄せて、御前にさし入れたまへるを、うつぶして御覧ずる御髪のうちなびきて、こぼれ出でたるかたそそばかり、ほのかに見たてまつりたまふが、飽かずめでたく、すこしもの隔てたる人と思ひきこえましかば、とおぼすに、忍びがたくて、

若草のね見むものとは思はねどむすほれたる。こここそすれ

御前なりつる人々は、この宮をばことに恥ぢきこえて、ものうしろに隠れたり。ことしもこそあれ、うたてあやし、とおぼせば、ものものたまはず。ことわりにて、「うらなくものを」と言ひたる姫君も、されて憎くおぼさる。紫の上の、取り分きてこの二所をばならはしきこえたまひしかば、あまたの御なかに、隔てなく思ひかはしきこえたまへり。

(七・八七―八)

ここには「伊勢物語」が踏まえられている(ただし一部の本を除いて大方の本には「琴教へたる所」はない)が、同時にそれとの相違も示している。匂宮は女一の宮が同腹の兄妹というような近い関係でなくせめて異腹であればと

思っている。歌でも自ずと限界があると考えていることが分かる。また女一の宮の反応も固いものである。匂宮は同腹の妹を慕いながらも、「伊勢物語」の主人公に比べると自己を規制する力が働いている。この点は柏木も姉弟と知っていれば恋をすることは無いと思われるのと同じである。その一方で、匂宮は同腹の女一の宮を無上のものと思ひ、他の女で比べられるものはないと思つている。「限りもなくあてに気高きものから、なよびかにかしき御けはひを、年ごろ二つなきものに思ひきこえたまひて、またこの御ありさまになずらふ人世にありなむや云々（八六）」。

また匂宮に対してはその好き者ぶりがここにも示されているし、歌を詠みかけたのも女一の宮によつて「ことしもこそあれ、うたてあやし」と、疎ましくおかしなことを受け取られている。これは柏木が恋文を贈つたことを「をこがましきこと」と言つた気持ちにも通じるものがある。柏木の場合と同じように結局二人の仲がこれ以上進展することはない。しかし、匂宮が好き者であることと同腹の妹を慕うこととは関係があるように思われる。

二、先行作品の例

次に「源氏物語」以前の物語等について再検討しておく

たい。一つには既に総角の巻に踏まえられていた「伊勢物語」(四十九段)、それに「宇津保物語」(藤原の君の巻)のように兄妹の間柄を越えることのないものがある。二つには「篁物語」、それに記紀のように兄妹の間柄を越えるものがある。

先ず前者の「伊勢物語」の例である。

むかし、男、妹のいとをかしげなりけるを見りて、

うら若み寝よげに見ゆる若草を人のむすばむことを
しぞ思ふ

と聞えけり。返し、

初草のなごめづらしき言の葉ぞうらなくものと思ひ
けるかな

「聞えけり」とあるところから身分の高い異腹の妹とも考えられる⁽⁴⁾。男には妹が他の男のものになること、つまり自分とは結婚出来ないことは前提になっている。妹も男の言葉は今までに耳にしたこともないものとしている。そして、男には妹を異性としても見る耽美的な心があり、女の歌では男の思いがけない一面を浮かび上がらせている。

「宇津保物語」藤原の君の巻の仲澄は同母妹のあて宮に
思いを寄せる⁽⁵⁾。

またかくて、夕暮に雨うち降りたる頃、中島に水の大

まれるに、鳩という鳥の心すごく鳴きたるを聞き給ひて、侍徒、あて宮の御方におはして、かく聞こえ給ふ池水に玉藻しづむはにほどりのおもひあまれる涙なりけり

とは御覽するや。

と聞え給へば、あやしう思して、いらへ聞え給はず。

この侍徒も、あやしきたはぶれ人にて、よろづの人の、「婿になり給へ」と、をさをさ、聞え給へども、さも物し給はず、このおなじ腹に物し給ふあて宮に聞えつかむと思せど、あるまじきことなれば、ただ御琴を習はし奉り給ふついでに、遊びなどし給ひて、こなたにのみなむ常に物し給ひける。(一、一七三―四)⁽⁶⁾

仲澄が恋の歌を詠んでもあて宮は「あやしう思して」とあるように、受け入れる余地は全くない。仲澄は「あやしきたはぶれ人」ではあるが、あて宮に言い寄って親しくなることは「あるまじきこと」と考えている。結局、仲澄は望みがかなえられることなく死ぬることになる。仲澄は「あやしきたはぶれ人」であつたが故に同母妹のあて宮に言い寄つたと言えるであろう。常軌を逸した行為が結果として身を破滅させたと考えることが出来る。

次に後者の『篁物語』の男の場合は異腹の妹である。

親の、いとよくかしづきける、人のむすめ、ありけり。女のするざえのかぎりしつくして、今は「書読ません」とて、「博士にはむつまじからん人をせん」とて、異腹の子の、大学の衆にてありけり。異腹なりければ、うとくて、「あひ見ず」などありけれど、「知らぬ人よりは」とて、すだれ越しに、几帳たててぞ読ませける。この男、いとおかしきさまを見て、すこし馴れゆくままに、顔を見え物語などもして、文のてといふものを取らせたりけるを、見れば、かくひちして、一首をなん、書きたりける。

なかにゆく吉野の河はあせななん妹背の山を越えて見るべく

とありければ、「かゝりける」と心づかいしけれど、「なさけなくやは」とて、

妹背山かげだに見えてやみぬべく吉野の河は濁れとぞ思ふ(二五)⁽⁷⁾

この男には兄妹ということについて抑制する心よりもそれを越えようとする心の方が勝っている。これは異腹ということがあるのでそれほどこだわりを持たないのである。それに対して女は兄妹の間柄のまままで隔てを置いておいた

方がよいとしている。このように両者は歌のやりとりの上では対立していると見られる。以後二人の仲は進展して女が懐妊し、それを女の親が知って閉じ込め、その結果女は死ぬ。これは、異腹ではあるが、「妹背の山を越え」る例であり、その結果として女が懐妊し、女の死という悲劇的結末を迎える点で特徴がある。

これは物語ではないが、「古事記」下巻の允恭天皇の条に木梨の軽の太子と同母妹軽の大郎女とが通じる話がある。

天皇崩りまして後、木梨の軽の太子、日継知らしめすに定まりて、いまだ位に即きたまはざりしほどに、その同母妹軽の大郎女に奸けて、歌よみしたまひしく、

あしひきの 山田をつくり 山高み 下樋をわしせ
下媵ひに 吾が媵ふ妹を 下泣きに 吾が泣く妻を
昨夜こそは 安く肌触れ

こは志良宜歌なり。また歌よみしたまひしく、

笹葉に うつや霰の たしだしに 率寝てむ後は
人は離ゆとも

うるはしと さ寝しさ寝てば 刈薦の 乱れば乱れ
さ寝しさ寝てば

こは夷振の上歌なり。 (二六〇一) (8)

軽の太子が軽の大郎女に通じたことよって天下の人々が

太子に背き、穴穂の御子に依った。そして両者間に戦が起こり、軽の太子は捕えられて伊予の湯に追放される。そして後を追って来た軽の大郎女と共に自ら死ぬ。太子であった軽の太子がその地位を無に帰したのみならず、死という結末に至ったのは、同母妹に通じたということが発端にあつた。「奸け」には不倫な行為をする、という意味がある。これは太子としての資格に欠けるのみならず、そのことが将来の悲劇を招来したと言えるであろう。即ち常軌を逸した行為によつて身を滅ぼしたとすることが出来る。

この話は「日本書紀」卷第十三、允恭天皇の条にもある。

二十三年の春三月の甲午の朔庚子に、木梨軽皇子を立てて太子とす。容姿佳麗し。見る者、自づからに感でぬ。同母妹軽大娘皇女、亦艶妙し。太子、恒に大娘皇女と合せむと念す。罪有らむことを畏りて黙あり。

然るに感でたまふ情、既に盛りにして、殆に死するに至りまさむとす。ここに以為さく、徒に空しく死なむよりは、刑有と雖も、何ぞ忍ぶること得むとおもほす。遂に竊に通けぬ。乃ち慚。懐少しく息みぬ。仍りて歌して曰はく、

あしひきの 山田を作り 山高み 下樋を走せ
下泣きに 吾が泣く妻 今夜こそ 安く膚触れ

このことは天皇の知るところとなり、軽大娘皇女が伊予に流される。四十二年冬十月に天皇の葬礼が終つたが、「是の時に、太子、暴虐^{あつくさしまるわざし}行て、婦女に淫けたまふ」ということによつて人心が離反し、穴穂の宮に攻められ、自殺する。軽皇子は罪を畏れて自制するが、堪えることが出来なくなつて遂に常軌を逸した行為に及ぶ。「書紀」では輕皇子の悲劇は同母妹軽大娘皇女に「竊に通け」たことが、直接の原因ではないようである。しかし、それは後の「暴虐行て、婦女に淫け」る振舞いに繋がつていくのであろう。その意味で、この事件はその悲劇を招来する上で大きな役割を持つと考えられる。

このように特に記の方では、輕の太子は同母妹輕の大郎女に「奸け」たことによつて、太子の位を失つたのみならず、自らの死をも招き寄せる。坂下圭八氏は「木梨輕太子——それは輕はずみによつて禁忌を侵犯し、王位に上りそこねた皇子の話に他ならない」と言われている。根本原因は常軌を逸した振舞いに及ぶような輕の太子の心の輕さによるのである。また一旦共寝をしたからはどうなつてもよいというような自制心の利かないところにもその性格の弱点が表われている。

以上の中で「宇津保物語」の仲澄、記紀の輕の太子の場合は同母の兄妹であり、しかも前者は「あやしきたはぶれ人」、後者も心の輕さと自制心のなさという性格上の共通点に加えて、前途のある身や太子の地位を無にするという類似点がある。

三、柏木の実像

柏木を仲澄や輕の太子との繋がりにおいて考えてみると、どのように捉えられるであろうか。

柏木は見かけと実際がかなり違つている。胡蝶の巻で、玉鬘に求婚者の恋文が届けられる中で源氏は柏木の文が寄せられたことについて右近に次のように言つている。

「さて、この若やかに結ばれたるは誰がぞ。いといたう書いたるけしきかな」と、ほほゑみて御覽ずれば、
「かれは、執念うとどめてまかりにけるにこそ。内の大殿の中將の、このさぶらふみるこそぞ、もとより見知りたまへりける伝へにてはべりける。また見入る人もはべらざりしにこそ」と聞こゆれば、「いとらうたきことかな。下らふなりとも、かの主たちをば、いかがいとさはしたなめむ。公卿といへど、この人のおぼえに、かならずしも並ぶまじきこそ多かれ。さる

中にも、いとしづまりたる人なり。おのづから思ひあはする世もこそあれ。掲焉にはあらでこそ言ひまぎらはさめ。見所ある文書きかな」など、とみにもうち置きたまはず。

(四・四五)

源氏の控え目な人(「いとしづまりたる人」という見方は、小さくひき結んだ手紙の形にも関連しているのであろう。

源氏は、柏木がまだ身分が低くても内大臣家の子息としての声望を評価する。「しづまりたる」という見方も表面的であるように思える。また常夏の巻でも、源氏は六条院を訪れた柏木の弟達を見て玉鬘に次のように言っている。但しこの場に柏木はいない。

「有職どもなりな。心もちぬなども、とりどりにつけてこそめやすけれ。右の中将は、ましてすこし静まりて、心はづかしき気まさりたり。いかにぞ、おとづれきこゆや。はしたなくも、なさし放ちたまひそ」などのたまふ。

(四・二六)

この二つの例から、源氏は柏木を控え目な人として見る見方を持っていることが分かる。或いはそれは一般的なものであったかも知れない。柏木の巻では、夕霧も「いとようもてしづめたるうはべは、人よりけに用意あり、のどかに、云々」(五・三〇二)と見ているが、源氏と違うのは努めて

そうしていると見ている点である。

反面で柏木には白方勝氏が玉鬘物語における柏木について次のように言われている面がある。

好き者であり、よく言えば情熱的であるが、悪く言えば感情的ではせやすい。しかもその感情の動きはかなり執拗でねばっこい。

柏木には玉鬘への思いに身を没入させるところがあるようである。先の「まことの筋をば知らず、ただひとへにうれしくて、おりたち怨みきこえまどひありくめり」もそうであるが、その外に次の例もある。

対の姫君の御ありさまを、右の中将は、いと深く思ひしみて、言ひ寄るたよりもいとかなければ、この君をぞかこち寄りけれど

(四・八〇)

この中将は、心の限り尽くして、思ふ筋にぞ、かかるついでにも、え忍び果つまじきこちすれど、さまざまもてなして、をさをさ心とけても掻きわたさず。

(四・一一九)

頭の中将、心を尽くしわびしことは、かき絶えにたるを、うちつけなりける御心かなと、人々はをかしがるに、

(四・一九四)

一途に思い込むというところがあると共に、若さのせいも

あるうが、自分を見失つてしまいかねないところもあると言えよう。これは紀の軽皇子が同母妹の軽大娘皇女への思いが昂じて堪えきれなくなる様子を思わせる。この思いは後の女三の宮に対する柏木の思いに通じるものと見られる。白方氏は、柏木が玉鬘に実姉と知らずに求婚したことや、事情をよく確かめないで近江の君を連れて来たことなどから次のように述べられている。

柏木は源氏に称賛されるほどの有望な人物で、才芸もあり、落着いた人柄の貴公子であるが、反面若びたる心、軽びたる一面があり、その点重りかな夕霧とは対照的である。(略)とすれば、彼の心軽さは、彼本来の資質的なものであり、それが以後の柏木の人柄の不安定さにつながっていつているといえよう。⁽¹²⁾

「いとしづまりたる人」として見られる柏木であるが、その内面は必ずしもそうではない。胡蝶の巻で、玉鬘の許に置かせた文の様子は次のようである。

右大将の、いとまめやかに、こととしきさしましたる人の、恋の山には孔子のたふれまねびつべきけしきに愁へたるも、さるかたにをかしと、皆見くらべたまふなかに、唐の縹の紙の、いとなつかしう、しみ深う匂へるを、いと細く小さく結びたるあり。「これはいか

なれば、かく結ばほれたるにか」とて、引きあげたまへり。手いとをかしうて、

思ふとも君は知らじなわきかへり岩漏る水に色し見えねば

書きざま今めかしうそほれたり。「これはいかなるぞ」と問ひきこえたまへど、はかばかしうも聞こえたまはず。^(四・四二)

この中で注目されるのは文の書き振りが「今めかしうそほれたり」とされていることである。「そほる」については、「はしやいで羽目をははず、の意」とされ、「洒落くずしてゐる」と訳されている。⁽¹³⁾外に書について「そぼれ」とされているのは梅枝の巻の朧月夜の尚侍である。

院の尚侍こそ、今の世の上手におはすれど、あまりそぼれて癖ぞ添ひたる。^(四・二六五)

これは「洒落過ぎていて」と訳され、「岷江入楚」の「あまり筆のき、たるにまかせて正体ならぬ事などの出来たるなるべし」が引かれている。⁽¹⁴⁾朧月夜の尚侍については、賢木の巻の、源氏と細殿の局で逢う場面では次のようにその様子が捉えられている。

女の御さまも、げにぞめでたき御さかりなる、重りかなるかたはいかがあらむ、をかしうなまめき若びたる

心地して、見まほしき御けはひなり。

(二・一四七―八)

「重りかなる方」についての懸念が添えられているが、これは花の宴の巻の、初めての出逢いの場面でも「女も若うたをやぎて、強き心も知らぬなるべし」(二・一五三)とあつたことが思い合わされる。また後の若葉上巻で、源氏が再び繕りを戻すように求めた場面でも「もとよりづしやかなるところはおはせざりし人の云々」(五・七二)とあり、若葉下巻でも、女三の宮の事件を知った時に「かの御心弱さも、少し軽く思ひなされたまひけり」(五・二四二)とある。このように見ると隴月夜の尚侍の、源氏との関係において慎重でない点、流され易い点はその「そばれて」という筆跡にも表われていると見るべきであろう。そうすると柏木にもそのような弱点があるべきである。そうすると柏木もなろうか。隴月夜の尚侍は右大臣の六の君である。その姉の四の君は柏木の母になる。柏木は右大臣家の四の君の許で養育されたと考えられる。その右大臣家の気風は花の宴の巻で、その藤の宴に招かれた源氏の目に、女房たちのものを言う態度が「重々しうはあらねど」とあるのを始め、次のように映っている。

そらだきものいとけぶたうくゆりて、衣のおとなひい

とはなやかにふるまひなして、心にくく奥まりたるけはひは立ちおくれ、今めかしきことを好みたるわたりにて、

(二・六二)

「今めかし」という言葉も柏木の書き振りの形容にあつた。尤も父内大臣も絵合の巻で「あくまでかどかどしく今めきたまへる御心」(三・一〇〇)とあり、これは父から受け継いでいるとも見られる。このように見ると隴月夜の尚侍と柏木は共に右大臣家の気風を受け継いでいるのである。そうであれば柏木にもそのような性格が見られるのではなからうか。隴月夜の尚侍は源氏との間に過ちを犯して源氏の須磨退去をひき起こす。柏木もまたそのような危うい面を持つていると思われる。

後の柏木の巻で、女三の宮との過ちを犯し、結果として死に至つたことについて、源氏はその死を次のように悼んでいる。

親たちの、子だにあれかしと泣いたまふらむにも、え見せず、人知れずはかなき形見ばかりをとどめ置きて、さばかり思ひあがり、おすすけたりし身を、心もて失ひつるよと、あはれに惜しければ、めざましと思ふ心もひき返し、うち泣かれたまひぬ。

(五・三〇〇)

また夕霧は次のように批評している。

なほ昔より絶えず見ゆる心ばへ、え忍ばぬをりをりありきかし、いとようもてしづめたるうはべは、人よりに用意あり、のどかに、何ごとをこの人の心のうちに思ふらむと、見る人も苦しきまでありしかど、すこし弱きところつきて、なよび過ぎたりしぞかし、いみじうとも、さるまじきことに心を乱りて、かくしも身に代ふべきことにやはありける、人のためにもいとしう、わが身はいたづらにやなすべき、さるべき昔の契りと言ひながら、いと軽々しう、あぢきなきことなりかし、など心ひとつに思へど、
(五・三〇二)

柏木は高い望みを持ち、立派であつた身を自分で滅ぼした。また柏木は少し情に流されるところがあつてやさし過ぎる性質のためにこういう結果を招いた。そしてあつてはならないことに心を乱して身を滅ぼした。このような柏木の性格とそれがもたらした悲劇的な結末とは、「宇津保」の仲澄や記紀の軽皇子の姿と通うものがある。

終 わ り に

柏木の玉鬘への恋には源氏が深く関わっている。また源氏は玉鬘の養父の立場にあると同時に玉鬘に恋心を持つている。ここでは源氏と柏木は対立する関係にはなく、また

玉鬘は源氏の妻でもない。しかし、このような玉鬘をめぐる源氏と柏木という関係が、若菜上の巻以降の、女三の宮をめぐる源氏と柏木の関係に繋がっていくものであることは容易に見て取れる。この女三の宮をめぐる源氏と柏木の関係は、藤壺の宮をめぐる桐壺の帝と源氏の関係に向き合っている。とすれば、この玉鬘をめぐる源氏と柏木の関係は、藤壺の宮をめぐる桐壺の帝と源氏の関係とも繋がっているのではないかと思わせる。藤壺の宮は桐壺の帝から「ただわが女御子たちの同じ列に思ひ聞こえむ」(一・三四)と言われていたのである。このように見ると、この玉鬘をめぐる源氏と柏木の関係は、藤壺事件を女三の宮事件に繋ぐ仲立ちの役割を持っていると考えられる。藤壺事件における源氏の役割からすれば、女三の宮事件においては夕霧がそれに相当する。それを源氏の後継者であるがゆえに夕霧から柏木に肩代わりさせる必要があつたために、ここに源氏の養女、また柏木と姉弟である玉鬘との関係が設定されていると思われる。

以上のように見ると、柏木の玉鬘への恋が姉弟の間柄として設定されたのは、心の軽さによって禁じられた同母妹との恋に地位を失い身を滅ぼす仲澄や軽皇子のような運命を柏木の上に重ねるためではなかつたかと考えられる。柏

木としても姉弟の恋が認められるものではないが、知らず
にいたことであつたとしても結果としてそこに踏み出して
いたことになる。後に物語は女三の宮との過ちという異
なつた展開をたどることになるが、柏木の運命の出発点に
おいてその悲劇的な結末が方向付けられていたと考えられ
るのである。

注

- (1) 伊藤博「源氏物語の恋の基底―身内的恋の系譜―」（『国語と国文学』昭和五十九年十一月）
- (2) 「源氏物語」本文の引用は新潮日本古典集成本により、巻数と頁数を示す。以下同じ。
- (3) 角川文庫本により、頁数を示す。
- (4) 注3の書、五二頁脚注。
- (5) 仲澄と柏木の関わりについては、石川徹「宇津保物語の人間像」（『平安時代物語文学論』所収。昭和五十四年四月笠間書院刊）。河内山清彦「柏橋像の形成——『宇津保物語の懸想人の中から——』（『古代文化』昭和五十一年七月）等。
- (6) 日本古典全書本により、巻数と頁数を示す。
- (7) 日本古典文学大系本により、頁数を示す。
- (8) 角川文庫本により、頁数を示す。
- (9) 日本古典文学大系本により、巻数と頁数を示す。
- (10) 「軽太子・軽太郎女の物語——『古事記』・『日本書紀』の方

- (11) 法と表現——（『国語と国文学』平成三年五月）
- (11) 「柏木の性格と心理構造」（『源氏物語の探究』第二輯所収。昭和五十一年五月 風間書房刊）二二四頁
- (12) 注11の書。二二四頁
- (13) 日本古典文学全集本三、一六九頁及び一六八頁。
- (14) 注13の書四〇八頁。